ヤスクニ通信 No.157　2012 年 10 月 19 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・西川重則 TEL/FAX 042-574-9210
事務局 西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP http://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜日 7:00～9:00pm（祝日の場合第 4 金曜日）
会場　たんぽぽ舎 TEL 03-3238-9035　FAX 03-3238-0797

ヤスクニ・レポ　157
なぜ戦争は起こるのか
―主にあって、歴史に学び、今を生きよう
代表　西川重則

１

驚くべき発言が多い昨今である。しかも為政者による発言である。たとえば、石原慎太郎都知事による次のような発言である。

「（中国と）『戦争も辞さず』みたいな話をして、総理はあきれた」――。前原誠司国家戦略相は 12 日のＢＳ朝日の番組収録で、尖閣諸島の購入問題をめぐって、東京都の石原慎太郎知事が８月 19 日の野田佳彦首相との会談で発言した内容を、同席者から聞いた話として明かした……（「朝日新聞」、２０１２・１０・１３、参照）。

それにしても、なぜ都知事という重要な要職に就いている公務員が、「戦争も辞さず」といった危険な発言をしたのだろうか。話の内容は、現在毎日のように新聞に報道されている日本と中国の緊張関係を余儀なくされている尖閣諸島問題であることは理解できる。しかしなぜ公務員のひとりである都知事が、大きな影響や波紋をもたらすような発言をしたのだろうか。

確かに、石原都知事は中国蔑視の思想の持ち主である。次の通りである。「どこの国との関わりでも、日本人は、奇妙なほど卑屈になったり傲慢になったりして、いろいろ大きな錯覚を持ちがちだ。中国に対する過剰な罪悪感、というよりむしろ原罪感……」（石原慎太郎著『現代史の分水嶺』、１８３頁、参照）と書いているが、なぜ中国を事例として挙げるのか。私には蔑視の思想の表れとしか思えない。

それでは、なぜ「戦争も辞さず」といった驚くべき発言を公共のテレビで発言をするのかを改めて問わねばならない。なぜ事例として隣国中国の名前を平然と使ったのか。おそらく、日常的にそう考えているからではないのか。それではなぜ日常そのように考えているのだろうか。戦争も辞さずという考えを日常的に考えているからではないのか。聖書に次のように書かれていることを、私は重要視している。

「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望がその原因ではありませんか」（ヤコブの手紙４・１）。

もちろんどこの国も完全とは言えない。しかし、石原都知事が右のような発言をする要因は、彼の心の中に、本人は気づいていないかも知れないが、侵略の思想が根づいているのではないか。歴史の事実として、対中国戦争は、侵略の思想による長い間の侵略戦争の継続となったことは誰も否定できないであろう。戦争は侵略の思想から始まる事例は次の通りである。１９９１年８月１５日、ＮＨＫＴＶのアナウンサーの質問に対し、石井秋穂氏（戦争中、陸軍中佐。侵略戦争を決定した陸軍省軍務課高級課員のひとり）は、「なぜ日本は中国撤退をのまなかったのか」との質問に対し、しばらく絶句し、やがて、小さい声で、「侵略の思想があったんですよね」と（西川重則著『「昭和館」ものがたり』、６７頁、参照）。

中国撤退の問題は、具体的に言えば、１９４１年１１月２６日、アメリカのハル国務長官が日米交渉の最終段階で、中国の要請を考慮し、対中国戦争を止めさせる道は、日本の天皇の軍隊を中国から撤退させるしかないと判断し、いわゆる「ハル・ノート」を提議したことを指している。

その直前の１９４１年１０月１８日、東条英機内閣が成立している。東条内閣は、ハル・ノートがアメリカ始め連合国の対日戦争挑戦を意味すると考え、ハル・ノート提議の直後の一二月一日、アメリカ、イギリス、オランダ相手に開戦を決定した。「昭和天皇」が出席している御前会議での開戦決定である。

２

なぜ日本は、ハル・ノートを受け入れ、アジア・太平洋戦争を回避する道を選ばなかったのであろうか。

次に報告する「米英への宣戦詔書」（１９４１・１

２・８）に見られる通り、日本が戦争に突入する時の大義名分は、「自存自衛ノ為」であり、「東亜永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝国ノ光栄ヲ保全セムコトヲ期ス」と言うのである。

ひるがえって、「満州事変」（１９３１・９・１８）の翌年１９３２年1月８日に、「関東軍に勅語下賜」の場合もその内容は同様の理由が明記されている。

「……自衛ノ必要上関東軍ノ将兵ハ果断神速……衆ヲ制シ速ニ之ヲ芟討［サントウ。「草を刈るように敵をうち平げること」］セリ　朕深ク其忠烈ヲ嘉ス汝将兵……東洋平和ノ基礎ヲ確立シ朕カ信倚ニ対［コタ］ヘンコトヲ期セヨ。（千田夏光著『天皇と勅語と昭和史』、１６８頁、参照）。

なお右の勅語の全文および説明については西川重則著『「昭和館」ものがたり』、「第四章　侵略戦争を否定する『昭和館』」、５４―６７頁、参照）。

今回私は、「なぜ戦争は起こるのか」という大きなテーマを考え、いくつかの事例を挙げて考えた。しかし、結論は、戦争はそれぞれの国が自民族中心思想を克服することができず、最悪の選択である戦争の道を選ぶことに改めて気づかされた。他国の場合はさておき、日本の近現代史を検証する時、侵略思想による侵略・加害の歴史をくり返した日本であったことを否定できない。

衆・参「憲法審査会」、自民党の「日本国憲法改正草案」（２０１２・４・２７、公表）の現状、内容を見る限り、まさに侵略・加害の歴史についての反省もなく、再び戦争の道を選ぶことがあり得ると憂えざるを得ない結論となる私である。

そのような私であるが、先週の土曜日（２０１２・１０・１３）、山梨県大月市にある大月キリストの教会を会場にして、憲法審査会の問題について私たちの課題を講師として講演した時に、主催者のひとりが、重慶大爆撃に参加したパイロットが、あまりに悲惨な戦争の惨禍をもたらしたことに良心の痛みに耐えきれず、戦後自ら命を絶ったという話をされ、私は天皇制・国家神道体制下に受けた自らは気づかなかった侵略思想による侵略戦争の犠牲となった生きた証言を聞いた思いがした。私たちにとって、侵略思想を克服し、主にあって、平和を創（つく）り出す思想を体得し、主にあって、歴史に学び、今を生きる責任と課題を述べて、終わりたい（２０１２・１０・１５）。

２０１２年９月２１日例会奨励「主だけを礼拝せよ」

ヨハネの黙示録４章１～１１節　　**柴田　智悦牧師（日本同盟基督教団横浜上野町教会）**

今年８月 15 日は、全国戦没者追悼式をテレビで観ていた。参列者の「君が代」斉唱時、壇上の天皇皇后は「君が代」を歌っていなかった。自らを、賛美を受ける者として、つまり神として自覚しているのだろうか。その夜、関西の NHK では、大阪の君が代強制問題が特集され、卒業式で口元チェックをした校長がクローズアップされていた。

ヨハネの黙示録の天の御国においては、賛美が満ち溢れている。賛美は、主を愛する者たちの心からの応答であり礼拝の中心だ。そして、賛美されるべきお方は、御座に着いておられる神である主と、ほふられた小羊キリストである。天において、ただ神である主とキリストにのみ捧げられている賛美を、地においても同じように捧げたい。かつてイスラエルの民は、王を願い主を退けた(1 サムエル 8:6,7)。そしてその王は、彼らの息子たちを戦わせ、娘たちを働かせた。こうして、イスラエルは滅亡に向かって行った。元首を立てようと目論むこの国のある人々は、再び愚かな戦争を繰り返そうとしているのだろうか。

私たちは、「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」(ヘブル 10:30)と言われるお方に信頼し自らを律して行くことで過去の侵略戦争の責任を負い、その反省に立って戦争も武器も交戦権をも放棄した日本国憲法の精神を継承することが出来るのだ。そして、この主のみが、神として礼拝され、王として従うべきお方であり、この国の人々も、ただキリストの福音を信じることによってのみ救われるのだ。